

# スパイダーマン 3

2007(平成19)年4月23日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督・映画原案・脚本＝サム・ライミ／出演＝トビー・マグワイア／キルスティン・ダンスト／ジェームズ・フランコ／トーマス・ヘイデン・チャーチ／トファー・グレイス／ブライス・ダラス・ハワード／ローズマリー・ハリス (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2007年アメリカ映画／139分)

## 第4章

### 話題作ゾクゾク!

……世界同時公開に先駆けて、日本だけは5月1日に先行公開！ シリーズ3作目において、スパイダーマンは恋人や親友との総決算を迫られるとともに、新たな強敵と闘わざるをえないことに……。松坂大輔が着るレッドソックス軍団と同じ真っ赤なユニフォーム姿が持ち味のスパイダーマンは、今回少し不気味な黒いユニフォーム姿も披露するが、それは一体なぜ……。スパイダーマンといえども人の子(?)だから、パワーの誘惑、人気の誘惑には弱いもの……。そんな人間味豊かなスパイダーマンの活躍を、今回もタツプリと……。

### 世界に先駆けて、そして日本に先駆けて……

今年の5月は、2つのハリウッド大作の『パート3』が全世界で同時公開される。その1つ『パイレーツ・オブ・カリビアン／ワールド・エンド』(07年)は、5月25日に全世界同時公開。そしてもう1つ『スパイダーマン3』は5月5日に全世界同時公開。最近のハリウッド映画の大作はこういう傾向が強まっているが、今回は、さらに日本だけ全世界に先駆けて5月1日に公開してきたから、いかにハリウッドが日本市場を重視しているかがわかっていうもの。

このように、「同時公開」にウエイトをおいている映画は、マスコミ試写についても慎重。それは、事前に情報がじゃじゃ漏れになるのを防ぎ、作品に対する飢餓感と期待感をギリギリまでキープさせるため。そしてもちろん、近時問題と

なっている海賊版が生まれるのを絶対に防止したいため。

そんな『スパイダーマン3』のマスコミ試写が行われたのは、4月23、24日の2日間の数回だけ。嚴重な手荷物検査を受け、ケイタイを預けたうえで、さあ全世界同時公開に先駆けて、そして日本公開に先駆けて観た感想は……？

## 映画評論の難しさ その1

今や私にとって映画評論を書くのは、弁護士業務と並ぶ完全な「業務」になっているが、そうなるにつれて難しいことも増えてきた。その第1は、どこまで書いていいかという問題。M. ナイト・シャマラン監督の作品を代表として、「物語の結末は決して教えないで下さい」と強調されている映画は多いから、そういう映画については、詳細なストーリー展開や結末をバラすことはもちろん厳禁。しかし、他方でストーリーに触れなければ書くポイントが定まらないことも多いから、「ネタバレ注意」という警告とアナウンスをしながら、自分なりの評論を書いていくのが通常のスタイル。マスコミ向けの公開試写ではプレスシートが配布されるが、これは基本的にこの限度で広報して下さいという制約を意味しているため、これを超えてネタバレになることをどこまで書くかは難しいところ。実は私も、1度そんな書き過ぎの失敗をしたことが……。したがって、今回の『スパイダーマン3』の評論では、絶対にそんな失敗をしてはダメ……？

## 映画評論の難しさ その2

その第2は、第1と重複する面もあるが、書くタイミング。つまり、劇場公開前に書けることと、公開後に書けることのレベルに差があるということだ。私が映画評論を書き始めた2002年頃は、劇場公開している作品を観て書くのが多かったから、あまりそれを意識しなかったが、マスコミ試写による公開前の鑑賞が増えてくると、どうしてもそれを意識せざるをえないことに……。

さらに、当初はホームページに載せるだけだったから、あまりタイムリー性を意識する必要がなかったが、2006年3月からブログに載せることになると、どうしてもそれを強く意識せざるをえないことになった。だって、「明日〇〇の映画館に行って、△△を観よう」と思って私のブログを開いてみて、「こんなくだら

ん映画はやめといた方が……」と書かれていると、ぶち壊しになってしまうから……？好きなことを好きなように書いているだけのように思われているかもしれないが、私の映画評論家活動には、当然こんな苦労も……？

## 人間関係の総決算！

『パイレーツ・オブ・カリビアン／ワールド・エンド』も多分同じだと思うが、シリーズ3作目ともなると、それまで面白い展開を見せてきた人間関係を総決算する必要に迫られることに……。スパイダーマンことピーター・パーカー（トビー・マグワイア）の最も親しい人物は、第1に恋人のメリー・ジェーン・ワトソン（キルスティン・ダンスト）、第2に親友のハリー・オズボーン（ジェームズ・フランコ）、そして第3に伯母さんのメイ・パーカー（ローズマリー・ハリス）。本作では、ピーターとメイ伯母さんとの関係は良好なまま続くが、さまざまな事情から恋人メリー・ジェーンとの関係に大きな亀裂が生じ、遂に2人は別れることに……。さらに、愛する父ノーマン・オズボーン（＝グリーン・ゴブリン）が殺されたのはスパイダーマンのせいだと信じるハリーが、ニュー・ゴブリンに変貌し、復讐の鬼と化して襲ってくることに……。

いくらスパイダーマンが強くても、やはりしょせん人間だから、孤独が1番の弱点……。さあ、スパイダーマンすなわちピーター・パーカーの、恋人と親友をめぐる人間関係は、こんな悲惨な状態のままで終わってしまうのだろうか……？

## パワーの誘惑は……？そして黒の誘惑は……？

「男はいつまでもたくましく、女はいつまでも美しく……」というのは、某商品の宣伝文句だが、これは男女の深層心理を巧みについた、よくできたもの。

女性にとって、美の追求は死ぬまで永久のテーマだから、手をかえ品をかえ、品質改良を重ねた化粧品が、毎年新商品として発売されるのはある意味当然。これに対して男性におけるたくましさの追求は、年をとった後、今さら筋肉ムキムキマンのパワー全開おじさんになりたいと思う人は少ないから、その大半は、まむしドリンクとかバイアグラとか、年々衰えていく性的パワー回復の誘惑が多いのでは……？ピーターにとってはそんな特効薬はもちろん不要。しかし、スパ

イダーマンとしてのパワーには限界がないのだから、常に「もっと強く」という潜在的欲望をもって当然。本作では、そんなピーター＝スパイダーマンの内心の欲望に入り込む、ナゾの黒い液状生命体がポイントとなる。

スパイダーマンは、広島カープの赤ヘル軍団、また松坂大輔の加入で沸くレッドソックス軍団と同じ赤いユニフォームがトレードマークだが、黒い液状生命体がつりついたことによって、全身を黒く染めていくことに……。そして黒いスーツを着たスパイダーマンはその黒い液状生命体によって新たに与えられたパワーに酔いしれていくが、そのまま放っておいて大丈夫……。それが本作の基本テーマ……。

## 新たなキャラクターの誕生 その1

このように、シリーズ化を続けていくためには、それまでの人間関係の発展・展開そして清算・決算が必要だが、同時に新たなキャラクターの誕生も必要。そこで今回はじめて登場するのが、ピーターの最愛の伯父ベンを殺した犯人フrint・マルコ（トーマス・ヘイデン・チャーチ）。死刑囚として服役していたフrintが脱獄したのは、病気の娘に会いたいという偽りのない心から。そして、いかにも凶悪そうな顔をしている（？）ものの、彼は心の底から何かを訴えたそう。しかして、それは一体ナニ……？

そんな彼が追いつめられて逃げていったのは、ある科学実験所。実験所内にある巨大な穴の中に落ちていった彼を待ち受けていたある実験によって、彼は自分の肉体を砂に変え、またどんな形状にも変化できる特殊能力を身につけた「サンドマン」になることに……。ここらのキャラクターをどう評価するかは人それぞれだが、良くも悪くもこれがマーベル・コミックの特徴であり、スパイダーマンの人気の秘密……。そんなフrintは娘の手術のために金が必要だとして銀行強盗をくり返すが、そんなことで名前が売れてしまったため（？）、「伯父の仇」と復讐心に燃えるスパイダーマンとの対決を余儀なくされることに……。

## 新たなキャラクターの誕生 その2

その2は、ピーターの新たな恋人（？）グウェン・ステーシー（ブライス・ダ

ラス・ハワード)の誕生……? グウェンはピーターが学ぶ大学の同級生の才女だが、ピーターにとっては単なる女友達……? ところが、スパイダーマンとしてニューヨーク市民に圧倒的に支持されていることに有頂天になっているピーターが、スパイダーマンの歓迎イベントで易々とこのグウェンとキスシーンを演じたから大変……? もちろん当の本人であるピーターもグウェンもそのキスには何の意味も感じていないのだが、メリー・ジェーンにとっては……?

M. ナイト・シャマラン監督の『ヴェレッジ』(04年)では盲目の少女役を演じて強い印象を残し(『シネマルーム6』310頁参照)、『レディー・イン・ザ・ウォーター』(06年)ではヒロインとなるナーフ(水の精)のストーリー役を演じた(『シネマルーム12』72頁参照)ブライス・ダラス・ハワードが、そんな「おさわがせ女」の役に果敢に挑戦しているのは是非注目を……。

### 新たなキャラクターの誕生 その3

カメラマンとしての仕事でピーターと張り合い、どちらが先に正社員になるかをめぐって争うことになるのが、今回のニューフェイスとなるエディ・ブロック(トファー・グレイス)。日本ではつい先日、『発掘! あるある大辞典II』における番組データ捏造事件が大問題となったが、これは「氷山の一角」であり、似たような問題は多くのバラエティー番組で存在しているはず……? スcoop記事やScoop写真を求めるのはマスコミ関係者に共通する願望だから、そこには、やらせや捏造の疑惑が常につきまとうもの。エディはかなり有能な若手カメラマンという雰囲気だったが、ピーターとの競争に勝つために彼が使った手は……?

本作では敵となるキャラクターがやけに多く、このエディもその1人に……。そして、彼が「ヴェノム」となってスパイダーマンに対抗できるパワーを身につけたのは、やはりあの黒い液状生命体によるもの。「そのパワーに酔いしれたら、自分を見失うことになる……」とピーターは自戒の念を込めてエディに警告したが、復讐の鬼と化したエディがそんな言葉に耳を傾けるはずはない……。さあここに、サンドマンとヴェノムという、強力なスパイダーマン対抗連合軍が誕生したが、再び赤いユニフォームに身を包んだスパイダーマンは、この連合軍に対して、どのように立ち向かうのだろうか……? 2007(平成19)年4月25日記